

高齢ペット 慈しみ介護

がんや白内障、弱る足腰……。どこまで治療しますか、しませんか。医療の進歩で犬や猫も寿命が延び、家族同然に高齢化の問題を飼い主に突き付けるようになった。高い治療費に備える保険もある。いつか来る死だけでなく、長い介護も覚悟しなければならぬが、老いたペットと暮らす人々のまなざしは優しい。

がん・弱る足腰・認知症：

東京都杉並区の放送作家 石井彰さん(57)は、妻と交代で毎晩、居間に布団を敷き、17歳半のシバイヌ、ハンクに添い寝をする。認知症のあるハンクが、夜中に鳴いて何かを訴えるからだ。2年前脳梗塞で倒れた時は、立ち上がることもできず、獣医師から「安楽死も考えてください」と宣告された。血栓を溶かす薬を飲ませ続けると、幸い歩けるまでに回復。今もビルケースには、朝晩飲む心臓や肝臓の薬、夜鳴き防止の精神安定剤などが並ぶ。4月の治療費は12万円を超えた。

「知ってはいましたが、聞くとも見るとは大違い。ここまで大変とは」
鳴き声で要求を聞き分け、床ずれ防止に体を動かして、フードはお湯でふやかして口に入れてやる。家族

旅行もできないが、近所のお年寄りに「頑張ってるね」とハンクが声をかけられると、また長生きさせたいと願う。
日本のペット事情は、2000年ごろから大きく変わったといわれる。1990年代の大型犬ブームが終ってチワワのような小型犬が人気になり、犬も猫も室内で飼うのが普通になった。少子化と相まって、子どものように思う人が増えたという。

「外で飼う時代と比べて、体調の変化に気付きやすく、すぐ病院にかかることが増えました」と話すのは東京都昭島市の獣医師清水多佳子さん。



ハンクを外出用のカートに乗せる石井さん夫妻(東京都杉並区)

高度医療や保険 支えに

ペットの老化を見つけるポイント

老化を見つけるポイント(犬猫)

- 耳が遠くなる
- 毛が貧弱、やせる
- 頑固になる、甘える
- 動きが鈍い、段差を嫌がる
- 口臭、腫が白くなるなど

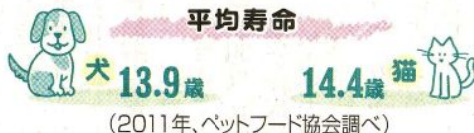


獣医師 清水多佳子さんによる

認知症の症状(犬)

- 止まらない単調なほえ
- うろつく、くるくる回る
- 表情が乏しい
- 昼夜の逆転など

平均寿命



になると、飼い主の選択肢も増えた。
町の動物病院でも抗がん剤治療や、胃に穴を開けてチューブで栄養を送る「胃ろう」手術をすることも。「時間もお金もかかるので、どこまでするかは家の事情次第。お年寄りの飼い主が老老介護をすることも多いので、短期入院や最近増えた介護サービスを使って時には息を抜くのもいいと思います」と清水さん。
ペット保険業界で6割のシェアがある「アニコム」には、約40万頭が契約しています。
いる。年間の保険料収入は約130億円。「この数は、日本で飼われている犬猫の2%くらい。まだまだ伸びると思う」と同社ではみる。老猫の暮らしや闘病を描いた漫画家ほしわに「どこまでするかは家の事情次第。お年寄りの飼い主が老老介護をすることも多いので、短期入院や最近増えた介護サービスを使って時には息を抜くのもいいと思います」と清水さん。

「古い」知り冷静な対処を

「犬の老いたく」の著者で、神戸市で老犬のしつけ教室を開催する中塚圭子さんの話。賢かった犬が、ソファに跳び上がったなくなったり、食に執着してこみ箱をあさったりする姿を見るのは悲しい。でもそういうものと知っていれば、冷静な対処も予防もできます。老犬のいる仲間と悩みを話し合うのもいい。今は核家族化で、人間の老いに触れる機会が少なく、ペットから学ぶことは多いと思う。私自身、今83歳の義母の介護をして



神戸市で老犬のしつけ教室を開催する中塚さん